

小気味いい響き川越まつり!

●川越の旅・その4!

4月7日(日)に開催した「川越の桜と歴史・文化を楽しむ!」の午後の部の記録です。午前中は、「ヤオコー川越美術館」で絵画と建築、「川越城本丸御殿」で川越城の歴史、そして昼には「川越幸すし」で食と交流を堪能させていただきました。午後の予定は、「川越まつり会館」と「蔵の街」で川越文化を、最後の「喜多院」では歴史を楽しませていただきました。今回の旅では、スタート時に私の不注意からカメラを落とすというミスがあり、ホームページ等からの引用文と写真が多いことをお断り申し上げます。

*

●川越まつり会館で雰囲気味わう



午後1時20分からは、蔵の街一番街に面した蔵造りの建物「川越まつり会館」【写真①; 以下HP写真より】を見学させていただきました。

玄関を入ると地下へ向かう回廊を進みます。そして大型スクリーンと山車が飾られている展示ホールに私たち32人が入ったので満席です。スクリーンには「川越まつり」



の様子が映し出されていました。【写真②: 展示ホーム】1時30分、お囃子の実演奏が始まりました。

*

◆川越まつりのお囃子



川越まつりの囃子は、文化、文政の時代に江戸から伝わったもの。源流はどれも、江戸の葛西囃子。川越では以前

からあった地元の里神楽と合流し古囃子として大成したといわれる。もともと囃子は近郊の農村部が担当していた。明治初期ごろより川越独自の改良を重ねて、今風の新囃子となり継承されてきた。

流派は王蔵流、芝金杉流、堤崎流に大別され、いずれも山車の移り変わりにともない、独自の改良を重ねて発展してきた。笛1、大太鼓1、締太鼓2、鉦1の5人囃子に舞い手(踊り)が出る。リズムとメロディーは流派や囃子連によって異なるが、多くの場面で笛がリードをつとめている。

【川越まつり公式HPより】

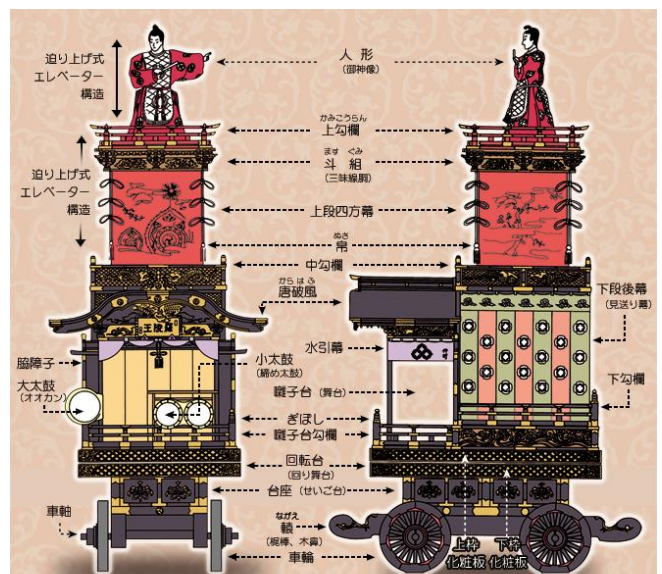
*

演目の「屋台」「官昇殿」では白装束の“キツネ”が出てきて舞います。キツネの口元が微妙に動くのが面白いです。続いての「鎌倉」「シメチョウ」「イ



ンバ」では「ひよっこ」に似た“もどき”が出てきて舞います。最後の演目「屋台」では「獅子」が出てきて舞います。

【写真④: 舞とお囃子】 お囃子と舞いが終わると、館のガイドの方が祭りの風景や展示について説明してくださいました。山車は町内毎の28台と市が寄贈を受けた1台の計29台があるそうです。いずれも8m程度で、人形と台座上段がエレベーター構造となっていて4mに下げることができるそうです。江戸時代に城門をくぐるための工夫とか…。出車同士が向き合って挨拶するために回舞台になっていることも特徴で1台1億2千万円以上とのこと。(〇〇)



仲町「羅陵王の山車」の場合

山車の平均概要	総丈(高さ)	人形…約1m90cm 山車…約6m30cm 合計総丈…約8m~	奥行き(長さ)	轆…約4m40cm 勾欄…約3m20cm(回り舞台部分)
	幅(左右)	唐破風…約3m10cm 勾欄…約2m20cm(囃子台部分)	重量	山車の構造によって異なるが、一般的な四ツ車の山車と人形で5~6t程度。

※川越の山車は明治34年の大祭を機に、本家である江戸の山車を超える豪華なものになった。
※山車の構造、部材の名称は町内によって異なることがある。